

ホトトギス

昭和二十四年九月二十六日 運轉五特別秋季臨時第六二七号
令和二年九月二日発行 第一二二三号 第九分

ホトトギス

九月号



風雅の小筥〔三十二〕

廣太郎

これを書いている令和二年六月十九日の段階では、新型コロナウイルスは未だ終息には程遠く、これから第二波、第三波の襲来が懸念されている程であるが、今日から県を跨いだ外出の自粛も解除され、少しずつ遠出が出来るようになるのではないだろうか。それでもホトトギス社の仕事は未だ全員が揃って自社するのではなく、在宅勤務も含めた仕事を続けているが、私事、会社で自分のデスクではなく、家でやる方が遥かに捗る仕事がある事も判った。雑詠選や、原稿執筆は、家でやる方が捗り、現にこの「風雅の小筥」も実は自宅で書いている。「アフターコロナ」という言葉が盛んに言われているが、世の中の仕事の形態も少しホトトギス社なりにより良い方向に向けて行かなければと思っている。

俳句会等の活動も、だんだん以前のような座の文学としての、句友が一箇所に集う句会というのやはり基本中の基本であると思うが、これまでこのコーナーでも申し上げてきた所謂リモート句会も、一つの方法として残って行く、というより若い世代、又仕事で忙しい人達には却って重宝するのではないかとも思うのである。

吟行目的で遠方にも行けない日が続いたが、自然豊かな場所は勿論作句には魅力であるが、今回の経験として、私の住んでいる東京都心でも至る所で季節と出会う事が出来る。当然の事ではあるが、身近にある自然の営みを観て、それに付随する人間の営みを詠む事も虚子の言う花鳥諷詠そのものであると思う。

旬日記 汀子

令和元年九月二日 ロイヤル俳壇

露けしと思ひ淋しいとは言はず
いつまでも風待つ心夕月夜
わが庭の芒に宿る心あり
露深き一と日一と日に置く心
九月七日 芦屋ホトギス会
霧抜けて抜けて着陸態勢に
九月八日 下萌旬会

胡弓の音今も心に風の盆
秋草を摘み手に溢れ壺に溢れ
風の盆その消息の二三日
気にかかると講話近づく葉月かな
挨拶のいつまで残暑見舞かと
九月十日 大阪倶楽部

穴感にも逃げ足のありにけり
コスモスの主の消息聞くことも
露けしや今日も予定のある一日
冷やかに心にとどめ置く一事
中天に月ある帰路となりけり
冷やかに処さねばならぬ大事あり
露しとど降りあし庭と気づきたる
九月十日 綿業倶楽部

露踏み庭の春秋問ふことも
手に摘んでふり返り見て秋の草
消えて行く露の光となりけり
秋草を摘めば野の風ついでくる
露深き庭と気づきしよりのこと
九月十二日 清交社

その後の消息問はむ秋出水
停電のいつまでつづく秋出水
列島のどこかが被害秋出水
窓開けて虫の世界に入りけり

その淡き色故目立つ藤袴
一歩づつ秋の気配に踏み入りぬ
聞き分けて虫の世界に加はりぬ
九月十三日 工業倶楽部

少しづつ動いてをりし穴感
切り上げて夜学といへぬほどのこと
月満ちてゆける今日あり夜々のこと
名月は今宵なりしか雨もよひ
名月や今日といふ日は又もなし
九月十五日 日本伝統俳句協会全国大会

夜は商都眠り眠らぬ人の秋
会場と熱気には秋を惜みけり
盛会となりしは秋の暑くとも
九月十六日 朝日カルチャー
大阪の秋晴三日使ひ切る
大過なく終りし会の秋の晴
昨日会ひ今日会ふえにし秋の晴
九月十七日 有恒俳旬会

会終へて家路近づく秋の潮
芋虫に触れたる指を洗ひけり
恒例の子規忌の旅の近づきぬ
会一つ終へて露けき日々となる
一つ済み一つ始まる露の世に
九月十七日 無名会

コスモスに招かれし日も遠ざかる
霧消えて平凡な町ありにけり
山霧の降りて来さうな夕べかな
さつきまで霧の気配のなき山路
霧晴れて眼下に海の展けたる
コスモスの君と呼ばれて遠き人
育てたるコスモスは野の花とこそ
九月十八日 夏潮旬会

役終へし帰路に仰ぎし月の道
会済みて心ほぐれてゆける月

この陽気月下美人は蕾上げ
又会へて又又会へて月の秋
満ちたるは欠けゆく月と仰ぎけり
九月二十日 時雨旬会

今も尚花野の記憶新しく
初潮の浜遠ざかる町となる
白萩のこぼるるままにある家居
白萩に家居楽しむ心あり
再びを訪ふことなき花野かな
会一つ済みば家居の秋の庭
九月二十日 アネモネ旬会

遠くから見て近づきて曼珠沙華
虫の夜を更かす家居を築き
咲きさうな月下美人を置き旅
一行事済みてくつろぐ虫の夜
どこまでも続く川風曼珠沙華
大阪で会ひ東京で遇ふも秋
九月二十一日 句会と講演の会

壇上に子規忌の供華を溢れしめ
鮭のぼる案外狭き河口かな
九月二十六日 きさらぎ会
ふり返るときに日々あり九月尽
松山へ日帰りの旅子規忌かな
風九月留守の一と息つける日々
旅九月留守の四日の書類持ち
旅多き季節過ぎゆく九月かな
子規忌より過ぎゆく日々の早さかな
九月二十八日 北信越ホトギス俳句大会前日旬会

町抜けてこれより山路寺の秋
爽やかや訪ひ得しこと心足る
九月二十九日 北信越ホトギス俳句大会
旅の雨止み爽やかに見学す
良寛の守られ記念館の虫
深秋の旅の心にある出逢ひ

良寛の守られ記念館の虫
深秋の旅の心にある出逢ひ

廣太郎句帳

廣太郎

令和元年九月二日 夢三忌全国俳句大会

忌心は二百十日を遠ざけて
稜線を厄日の風の撫でゆけり
創世の色を秘めたる大花野
主張せぬ高の彩り大花野
吾亦紅瓜高の色を日に弾き

九月五日 カトリック新開選者吟

稜線を統べ新涼の風となる

九月五日 蕉心会

秋日濃し大地焦がしてゆく程に
水尾伸びてより新涼の川となる

蜻蛉に空明け渡す鳴どち
秋蝶の高さを競はざる繾れ

爽やかに穏やかに橋潜る船
原稿を依頼されもし灯下親し

秋暑し二十八度で言うたがな
妻居らぬ夜長を如何に過ごさうか

九月七日 菅屋ホトギス会

七草の莖うてより忌を修す

秋日傘傾け富岳納めけり
朝霧の舞れて車窓に富士を嵌め

とんぼうの虚空を埋めゆく利那
九月八日 野分会菅屋例会

大花野忌日の色として楚々と
冷やかに喉滑りゆくブルゴーニ

大花野昔より蒼へ開けゆく
木道の尽きて花野に色生れ

冷やかな口許別れ話かな
九月八日 青嵐会菅屋例会

曼珠沙華 速夜の空 気染め上げて

恋心忌心となり曼珠沙華
鯛雲太平洋を狭めつつ
曼珠沙華君に唇盗まれて

九月九日 朝日カトリック若草句会

邯鄲に山の空気の入れ替る

彌祭忌父の忌日といふ句座に

夕霧の晴れて夕星明かしゆく

邯鄲や純正率に響き合ひ

霧雨に君との距離を近付けて

供華として赤は要や彌祭忌

九月十日 土筆会

秋潮や又日の本に空母生れ

オホーツクより日黒へと秋刀魚飛ぶ

草の花紫がちに暮るる園

九月十三日 六甲会

蓑虫の鳴けばこの恋終るかも

新幹線西へ蓑虫無く里へ

マルゴーにサントステフに酔ふ良夜

九月十四日 十五日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

七坂を綴る露けき歩幅かな

九月十七日 北國文芸選者吟

幸村の魂を鎮めて草の花

九月十九日 前議員句会

太閤の城十六夜を肩に抱き

颯風の去り空青く海蒼く

昼の虫夜を近付けてをりにけり

鯛雲霞ケ開の空狭め

九月十九日 登高会

出棺の空へ湧き立つ赤蜻蛉

鶏頭に忌日の風の集まり来

夜々の月人の生活を嘲笑ひ

月白や災禍の街の灯らざる

鶏頭に語り継がるる偉人かな

九月二十日 廣野会

眠らざる街眠らざる月孤高
パンを焼くこと教はりもして子規忌

九月二十一日 子規忌ホトギス社句会

マローラの九番を聴いてゐる子規忌

オホーツクの浪の奇幻鮭のぼる

胡麻を干す平家の喬といふ鈴持

石狩の河口響動もし鮭躍る

子規忌供華来年は又君の手で

九月二十二日 青嵐会東京例会

金風を放ち三門鎮もれり

大江戸の空凸凹に鯛雲

秋の声パドミントンのシャトルより

九月二十二日 野分会東京例会

黄に触れて花野の風の丸くなる

夕花野一番星を撥ね上げて

九月二十四日 若水句会

冷やかに舌を絡めて草を食む

露草や路地に始まる江戸風情

ソムリエの三人寄らば葡萄棚

茶立虫音の乾いてゆく静寂

正客のやうな顔して茶立虫

九月二十五日 目黒学園句会

風の色狗尾草に来て染まる

茶立虫畳の生活遠くして

夜の静寂引き寄せてある茶立虫

崩れては立て直したるねこじやらし

九月二十八日 北信越ホトギス俳句大会

五十六の生家露けき札みかな

五十六の墓石質素に爽やかに

佐渡の露君の視線に崩れゆく

鶉を見て鶉に見られてそぞろ寒

越後路の空へ伸びゆく刈田道

雑詠 廣太郎 選

誰も来ぬままに遅日の門を鎖す 香川 湯川 雅
 春灯を点すに早き窓なれど 同
 白服に葉影波打つ並木道 同
 十勝野の涯なき大地風五月 長岡 安原 葉
 竿折れんばかりや風の鯉幟 同
 枝仰ぎては初花を待つ人等 同
 公園の鳩を数へてゐて日永 神戸 立村 霜衣
 京日永市バス一日乗車券 同
 オンライン句会声つなげて日永 同
 卯浪寄す絵島に小さき供養塔 同 和田 華凜
 黒揚羽渡り朱塗の八雲橋 同
 花見酒 京都 伏見の女酒 同
 春惜む声聞くだけの電話して 龍ヶ崎 今橋 眞理子
 また次の旅を約して暮の春 同
 ゆく春やまた会へる日待つばかり 同
 折れさうな金のフォークや苳皿 東京 田丸 千種
 水しぶきあげて苳のつぶされぬ 同
 決別の苳 第二次 反抗期 同

尖りたる甘さ西瓜のひとつくち目 同 今井 肖子
 陶片の土中より出づ夏の果 同
 銀漢や今生きてゐる星いくつ 同
 海の色脱ぎ透きとほる烏賊の白 神戸 涌羅 由美
 点が線線が面へとラベンダー 同
 春泥の靴に道草ばれてをり 同
 飛花落花色即是空とはなりぬ 福山 竹下 陶子
 二の丸の桜吹雪に出会ひけり 同
 音立て、句帳にのりし落花かな 同
 何気無く始めおほごと大掃除 高松 永森 ケイ子
 投げ出して気を取り直し大掃除 同
 休むこと余儀無くされて大掃除 同
 眼指のはるかに上を鳥帰る 袋井 湖東 紀子
 囀のかきまぜてゐる空のあり 同
 振り向かぬ後ろ姿の臃かな 同
 東京がこんなな遠く風五月 神戸 藤井 啓子
 オンライン弥撒に与る五月かな 同
 臃へと臃へと人消えてゆく 同
 玄関の消毒液に五月来る 同 千原 叡子
 白靴を並べて自粛一家族 同
 退院の庭を色どる矢車草 同
 鬱積し屈折し春逝かんとす 熊本 岩岡 中正
 したたかなウイルスに春逝かんとす 同
 神のこゑ地にあまねかり犬ふぐり 同

雑詠句評（八月号より）

黒板に四月八日と書きしまま 神戸 藤井啓子

蟻穴を出て仮縫の黒を着る 前橋 伊藤涼志

四月八日は花祭の日でもあり、虚子の忌日でもあるが、この句は小中学校か高等学校の入学式のことなのであろう。

例年当り前のように行われてきた入学式が、今年はコロナウイルスの影響でほとんどの学校が休校になってしまったのである。

黒板に四月八日と書かれたままで誰もいない教室、そこには寂しさと不安だけが居座っているのであろう。そしてなす術もなくウイルスが去ってゆくのをむなしく待つしかないのである。

（紀 卍）

四月八日は虚子忌として馴染みであるが、この日は結構入学式、学校の新年度が始まる日でもある。ところが令和二年、新型コロナウイルス蔓延で入学式や新年度学校は閉鎖されている。三月の終業式の時に黒板に予め書かれた日付がこの日が過ぎても消されずにある。何とも意味深な句である。（廣太郎）

啓蟄の頃地上に現れる蟻の姿はまだどこか覚束ない様子である。作者はそんな蟻の様子を「仮縫」と表現された。擬人法による句であるが、イソップ物語の挿絵のような景を思わず想像してしまった。ほんの小さな蟻たちであるが、出来上がった衣装を纏うのは、はじめとした暑さを感じる頃であろうか。

作者の表現がとてもユーモラスで楽しい。（佳乃）

啓蟄で地虫や蟻が春の息吹を感じて冬眠から覚めて地上に這い出す季節がやって来た。春の日差を一杯に浴びた躍動感が感じられるが、未だ本格的な活動をするのには少し時間がかかるだろう。勿論蟻の黒々とした色はそのままであるが、それを「仮縫」と感じたところが初々しい。（廣太郎）

天地有情

心子選

笑めるとも次郎左衛門雛の顔
 二階へもどうぞと案内雛の宿
 大綿の綿の溶けゆく空の青
 大綿に空明け渡す古刹かな
 うるたへてゐるは人の世山笑ふ
 雛納め淋しきことをしてをりぬ
 確とあり百三歳の花明り
 夕映えてをり花として人と
 われになほ土筆ほどなるこころざし
 残党のごとくに花下につどひけり
 明日あることを信じて更衣
 紙兜かぶり食べぬる柏餅
 牡丹植ゑくれしことあり逝ぎにけり
 腰元の襦袢の色といふ牡丹
 池打てる落花集まる処かな
 一蝶の花に狂ひて失せにけり
 食ひ初めのひ孫の前の桜鯛
 食ひ初めの児の口にやや渋き新茶

長岡 安原 葉
 同 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同 同
 相模原 木村享史
 同 同 同
 神戸 和田華凜
 同 同 同
 熊本 岩岡中正
 同 同 同
 神戸 三村純也
 同 同 同
 東京 今井千鶴子
 同 同 同
 福山 竹下陶子
 同 同 同
 神戸 千原叡子
 同 同 同

散り初めてよりの明るさ庭桜
 花散つて落ち着く心ありにけり
 咲き満ちし花の念力なりしかな
 魂抜けの身をつつみくれ花吹雪
 夢ばかり見たる朝寝に疲れたる
 客船の旅は遠き日春の海
 戸締りを惜む夜風も若葉の香
 短夜や夢も短く終りけり
 オンライン会話のはづむ春の宵
 久々にラインの顔や春夕べ
 俳句史を読みつつ思ふけふ虚子忌
 疫病に止む無き家居花は葉に
 初蝶のやがて双つに国分尼寺
 木洩れ日をはこんでをりし蝶の屋
 いくたびも吉野を思ひつつ花下に
 散る花に思ひは又も吉野へと
 蟻穴を出て俳磚をたしかむる
 虚子館の草の芽としていつくしむ

龍ヶ崎 今橋真理子
 同 同 同
 西宮 本郷桂子
 同 同 同
 東京 山田閨子
 同 同 同
 金沢 藤浦昭代
 同 同 同
 東京 河野昭彦
 同 同 同
 宇治 西村やすし
 同 同 同
 仙台 赤川誓城
 同 同 同
 芦屋 黒川悦子
 同 同 同
 東京 大久保白村
 同 同 同